

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：52301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370653

研究課題名(和文) 模範英語小論文の計量傾向調査 効果的な英語小論文教授法の発案

研究課題名(英文) A Quantitative Analysis of Exemplary Journalistic and Academic Compositions:
Tips for Enhancing EFL Learners Writing Skills

研究代表者

伊藤 文彦(Fumihiko, Ito)

群馬工業高等専門学校・一般教科(人文)・准教授

研究者番号：50413745

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000 円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、模範的な英語小論文の計量的言語特徴を客観的かつ精緻に調査し、その結果を基に有効なライティング教授法を発案することである。具体的には、英字新聞社説とTOEFL (Test of English as a Foreign Language)のiBT (internet-Based Test)における最高評点エッセイ(5.0)を、模範英語小論文とし、英文としての熟達度要因を計量的に調査する。得られた客観的調査結果を活用して、英語小論文の質の向上に役立つライティング教授法を提言する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to identify tips for enhancing Japanese EFL learners' writing skills, through a quantitative investigation of exemplary compositions. Specifically, newspaper editorials and 185 TOEFL essays with perfect scores of 5.0 were used in this study. The readability of the editorials and the essays was investigated using the Flesch Reading Ease and the Flesch-Kincaid Grade Level indexes, along with a simple analysis of the numbers of words, sentences, and words per sentence. A vocabulary analysis of the editorials and the essays was then conducted using the JACET 8000. All English sentences in the editorials and the essays were then classified by complexity. Finally, based on the statistical results, the paper discusses the pedagogical implications for enhancing EFL learners' writing skills.

研究分野：英語教育

キーワード：英語教育 英語作文 統語的特徴 複文 Journalistic English Academic English T-unit Composition

1. 研究開始当初の背景

文法的に正しい英文を書き連ねても、優れた英語小論文にはならない。豊かな意味を理論的に述べていく必要があるからである。英語教授法(TESOL/TEFL)という学問の胎動以来、ESL(English as a Second Language)学習者が執筆する英語小論文を改善するための研究が積極的に行われ、構成(topic/supporting/concluding sentence, thesis statement)、接続表現(等位接続詞[and, but, so]、従属接続詞[although, as, because]、接続副詞[moreover, however, therefore]、順序・列挙表現(first, second, next, finally)、原因・結果表現[as a result, because of])、センテンス・コンバイニング・エクササイズ(sentence combining exercise)など、英語小論文の内容をロジカルにするための表現教育技法が確立されてきた。

しかし、英語小論文を量的に調査するというアプローチから、新しいライティング教授法を提案するという試みは、ほとんど行われてこなかった。これはコーパスと呼ばれる電子化された大規模言語集合が最近になるまで身近ではなかったことに起因する。優れた英語小論文とはどのような計量傾向を持っているものなのかという問いへの解答は未だに見出されていない。

2. 研究の目的

本研究の目的は、模範的な英語小論文の計量的言語特徴を客観的かつ精緻に調査し、その結果を基に有効なライティング教授法を提案することである。具体的には、英字新聞社説とTOEFL(Test of English as a Foreign Language)のiBT(internet-Based Test)における最高評点エッセイ(5.0)を、それぞれジャーナリスティックおよびアカデミック分野における模範英語小論文とし、熟達度要因を計量的に調査する。得られた客観的調査結果を活用して、英語小論文の質の向上に資するライティング教授法を提言する。

3. 研究の方法

(1)言語資料

本研究で作成および使用したコーパスは

週刊英字新聞The Nikkei Weekly社説(1年分。但し、1記事あたりの単語数が多い合併号は除外)、Astand(朝日新聞有料デジタルサイト)で提供している朝日新聞英文社説(1年分。但し、週1回のペースで発行されている土・日合併号は除く)、185編のTOEFL最高評点エッセイである。

(1)分析方法

概ね伊藤(2013)の予備調査に倣い、英文熟達度要因を1「基本的分量特性」、2「読みやすさ」、3「語彙」、4「統語的特徴」に分類し、それらの計量傾向を精緻に調査した。(また、可能な限り文章の優劣を決定する諸要因を考慮した総合的な量的調査を行うために、英語力と英作文力の相関関係や中学校検定教科書における等位・従位接続詞の使われ方などについても調べた。紙面の都合上、それらの説明については割愛する。)

4. 研究成果

(1)The Nikkei Weekly社説(82記事)[十分な考察が完了しているので、本稿ではこの調査を中心に説明する]

A. 基本的分量特性および読みやすさ

1記事あたりの平均単語数は426.92語、平均文数は18.82文、平均文長は22.84語であった。投野他(2007, p. 33)の報告によれば、日本の中学1年生、中学3年生、高校3年生が執筆する英文エッセイの平均文長は、それぞれ6.12語、7.57語、9.62語とのことである。このことを考えると、平均文長が20語前後となる英文は一般の大学生が容易に執筆できるレベルではなさそうだ。この観察は被験者を大学生とした複数のライティング先行研究からも裏付けられている(Ito, 2015, 2016; 伊藤, 2005)。

さらに、1記事あたりの平均段落数は10.65段落と多く、1段落あたりの平均文数は1.92文と非常に少ない。ジャーナリスティック分野における出版物は、紙幅(1行あたりの文字数)制限に伴う読みづらさの問題を解決するために、多くの段落から構成されているようである。英字新聞の特徴の一つといってよい。

受け身文の平均割合は15.99%、平均FRE(Flesch Reading Ease)は36.18、平均

FKGL (Flesch-Kincaid Grade Level) は 13.81 であった。アカデミック・エッセイを調査した伊藤(2013)の研究では、それらの平均値が 10.01%、56.27、10.03 であった。また、石岡他 (2009) は 2005~2008 年度のセンター試験の FRE を 60.00~85.00 程度、FKGL を 4.00~8.00 程度と報告している。受け身文の割合、FRE、FKGL といった指標の比較から社説記事の難読性の高さが見えてくる。

B. 語彙

JACET (Japan Association of College English Teachers) 8000 に採録されていない単語(レベル 8 よりさらに難しいとされる単語、固有名詞、ハイフン付単語、数字、略語など)は、「その他」として扱った。

語彙分析から使用語彙レベルの傾向が明らかになった。第一に、単語数の累積カバー率が 90% を超すためには、Level 8 までの単語が必要ということである(異語数の累積カバー率に至っては Level 8 までカウントしても 90% に到達しない)。

第二に、「その他」の平均単語数が 1 記事あたり 40.68 語(カバー率 9.42%)もあったということである。「その他」の単語数が 1 記事全体の 1 割程度にまで達している理由は、社説記事の単語には Level 1~8 以外の難しい単語の他、地名(例 Hiroshima, Nagasaki, Copenhagen)、会社名(例 Toyota, Panasonic, Nikkei)、政治家名、ハイフン付単語(例 liquid-crystal, eco-point, flat-panel)、数字、略語(例「Inc.」「Co.」「Corp.」「U.K.」「U.S.」「U.N.」「BOJ」)などが数多く含まれていたからである。

A. および B. では、基本的分量特性、読みやすさ、語彙に関する調査結果を述べた。The Nikkei Weekly の社説を英語力の高い大学生への読解教材とすることに問題はなかろうが、語彙が難解なので、教師が単語や熟語などを丁寧に説明するといった教育的サポートが必要であろう。政治・経済に関する背景知識や略語の説明(例「BOJ」=Bank of Japan、「LDP」=Liberal Democratic Party、「GDP」=Gross Domestic Product)なども必要と思われる。The Nikkei Weekly 社説は政治・経済に精通しかつ高度な表現力を持った英語母語話者が執筆していると考えられるため、日本の中・高等教育下にいる英語学習者が目

指す英語小論文とするにはあまりにレベルが高すぎる。

C. 統語的特徴

単文・重文・複文・重複文数の 1 記事あたりの平均値は、それぞれ 9.59 文(構成比率 50.96%)、0.70 文(3.72%)、8.05 文(42.77%)、0.49 文(2.60%)だった。最も単純な文構造である単文が最も多く使われていた。単文は書き手にとって執筆しやすく、読み手にとってわかりやすいので、単文が数多く使われていても不思議ではない。一方、重文の平均値は意外なことに 0.70 文と少なかった。つまり、1 編の記事に 1 文さえないということだ。1 文あたりの語数を増やし、より多くの意味を含んだ英文を作る簡単な方法としてセンテンス・コンバイニング・エクササイズというものがある。この教育技法は ESL (English as a Second Language) や日本人を対象とした英語教育で今なお注目されている。勿論、重文のセンテンス・コンバイニング・エクササイズも含まれている。しかしながら、重文は The Nikkei Weekly の社説において多用されている構文ではなかった。

重文の使用頻度が低い理由の一つとして、時事英語特有の文体特徴が挙げられよう(D. ジャーナリスティック・イングリッシュ参照)。英字新聞では <S+V. And S+V. > や <S+V. But S+V. > のように、And や But で始まる英文が非常に多い。

最後に、複文について述べる。単文と同様に複文もまた社説記事内でよく使われていることが 8.05 文という平均値や総文数に占める複文の構成割合(42.77%)から裏付けられている。重文および重複文の構成割合は 6.32% (3.72 + 2.60) にすぎないが、単文および複文の構成割合は 90% 以上となっていることから、社説英文には重文・重複文が少ないものの、単文・複文は非常に多く使われている。日本人英語学習者は、単文はある程度問題なく執筆することができるので、複文が彼らの英文の質を決定する重要な鍵となりそう。

単文・重文・複文・重複文に関する調査結果から、以下の教育技法を提案することができよう。1 文あたりの語数が 10 語に満たない英語学習初期の書き手は、そもそも執筆分量が少ないので、複文を念頭に置いた執筆スト

ラテジーを学ばせる前に、まず 10 語程度の英文執筆を心掛けるよう指導するべきである。そのためには重文を積極的に使わせてもよい。単語数の少ない単文より、単語数の多い重文の方がよいからだ。重文を使えば 1 文あたり 10 語どころか、少し工夫するだけで 15 語程度の英文を書くことさえできるようになるので、重文の使用は初級レベルの学習者に対しては大いに推奨されるべきである。

そして、ワンランク上のレベルの英文クオリティを目指す中級の書き手には、1 文あたりの語数が 16~20 語程度の英文を目指して執筆してもらう。このような長い英文の執筆はすべての文である必要はなく、時々でよい。同時に、重文を減らしていく一方で、複文を少しずつ増やしていく。ここで複文をいかに増やしていけるかが表現の幅を広げられるかどうかということにつながり、さらには英文エッセイ全体の質を決定する大きな要因の一つとなる。

D. ジャーナリスティック・レジスター

日本人英語学習者が執筆する英語作文には<S+V.And S+V.><S+V.But S+V.>という表現形式が数多く使われ、エッセイの質を安易に低下させてしまっている(e.g., Ito & Misumi, 2017; Izzo, 2000; 小林 2010)。<S+V.Because S+V.>のように誤用断片文と断じられることはないであろうが、アカデミック・イングリッシュでは断片文の一種と判断される場合もある。少なくとも、積極的に推奨されている構文ではない。しかし、意外なことにジャーナリスティック・イングリッシュでは頻繁に使用されている形式であることがわかった。日本語においても、場面や状況に応じた表現形式の使い分けがあるように、英語においてもレジスター(register=言語使用域、文体の特徴)というものがある。<S+V.And S+V.><S+V.But S+V.>という構文は時事英語特有の表現で、ジャーナリスティック・レジスターといってよい。日本語で発行されている日本経済新聞の社説は、経済に関する記事に特化している傾向があるものの、朝日新聞、読売新聞、毎日新聞、産経新聞などの社説同様、学校教育下にいる高校生・大学生が模範としてよい小論文といえる。しかし英語の場合、英字新聞におけるジャーナリスティック・レジスターと教育現場で使用されるアカ

デミック・レジスターが必ずしも同一ではないという言語的特性の差に注意しなければならない。

英字新聞で<S + V. And S + V.>, <S + V. But S + V.>といった表現形式を見かけるからといって、アカデミック・レジスターが求められる学校教育下の英文エッセイで多用してもよいというわけではないことをライティング学習者に教える必要がある。日本人英語学習者は formality(formal / informal)の意識や書き言葉・話し言葉の意識が希薄なため、あるいは日本語や中学生用検定英語教科書の影響で、And や But で始まる英文をためらうことなく執筆する傾向がある(Ito, 2015, 2016; 小林, 2009b; 阪上, 2004)。レジスターについて教えることなく英字新聞を授業教材として使えば、この執筆傾向がさらに助長されてしまうことであろう。

(2) 朝日英字新聞社説(252 記事)

概ね The Nikkei Weekly 社説と類似した平均値が算出されたので、本稿では朝日新聞に関する説明を割愛する。

(3) TOEFL Essays (185 編)

The Nikkei Weekly の調査項目に倣い、以下 A., B., C. に分類して述べる(数値は一部暫定)。

A. 基本的分量特性および読みやすさ

1 編あたりの平均単語数は 280.28 語、平均文数は 21.50 文、平均文長は 13.10 語、平均段落数は 4.30、受け身文の平均割合は 4.1%、平均 FRE は 71.60、平均 FKGL は 6.5 であった。The Nikkei Weekly 社説と比べ、平均単語数が著しく減った。また、The Nikkei Weekly 社説の平均文長が 22.84 語であるのに対し、TOEFL エッセイの平均文長は 13.10 語なので、随分読みやすくなっている。このことは受け身文の平均割合、平均 FRE、平均 FKGL から裏付けられている。石岡他(2009)で使用された言語資料であるセンター試験と同等レベルの読みやすさを持った英文であることも分かる。執筆しやすいレベルの英文といえよう。

B. 語彙

単語数の累積カバー率が 90%を超すために

は Level 2 までの単語が必要であった (Level 1 と Level 2 を合わせて 93.86% の累積カバー率)。A. の調査から予想できるように、The Nikkei Weekly 社説の結果と比較して、単語の難易度が著しく下がっていることが分かる。また、Level 1~3 までの累積カバー率は 95.76% であった。つまり、Level 1~3 までの基礎的な英単語 3,000 語の知識があれば、英語を外国語として学ぶ日本人が申し分のない英語作文を執筆することが語彙の面からは可能であるということも判明した。

C. 統語的特徴

単文・重文・複文・重複文の 1 記事ありたの平均値はそれぞれ 10.63 文 (構成比率 50.07%)、1.90 文 (8.95%)、7.69 文 (36.22%)、1.01 (4.76%) 文であった。The Nikkei Weekly 社説の重文割合 (3.72%) が TOEFL エッセイのそれ (8.95%) と比べて低いのはやはり <S+V. And S+V. > や <S+V. But S+V. > を受け入れるという言語的特性を持ったジャーナリスティック・イングリッシュと無関係ではない。つまり、本来アカデミック・イングリッシュでは重文で表現するところを、ジャーナリスティック・イングリッシュでは <S+V. And S+V. > <S+V. But S+V. > を使って簡潔に表現してしまうケースが多々あるために数値の傾向に差が生じているのであろう。相違点はあるものの、構成比率は総じてともに似ているとみなすことが可能で、どちらの小論文においても単文と複文だけで 85% を占めている。この興味深い客観的データから得られる教育的示唆として、日本人英語学習者は単文と複文を意識して書くといった指導が挙げられる。中学校・高校における文法指導や読解活動の成果で、日本人中学生・高校生は一般的には単文程度の英文は書けるので、複文のみの指導に焦点をあて教育しても十分な効果が期待できる。

また、1 T-unit あたりの平均単語数は 11.59 語であった。一方、The Nikkei Weekly 社説におけるそれは、平均で 1 編あたり 21.62 語であった。Hunt (1965) によって考案された 1 T-unit あたりの単語数という概念は、統語上の成熟さ (syntactic maturity) を示す指標として日本の英語教育界で長年注目されてきた (e.g., 大井, 2010; 富田 1989; 平野, 1992, 1993)。1 T-unit あたりの単語数

10 語前後は英語母語話者の中学 2 年生が書くレベル、14 語前後は高校 3 年生が書くレベル、そして 21 語前後の英文は優れた大人が書くレベルである (三浦 2006)。そのことを考えると、The Nikkei Weekly 社説記事は、ライティング初・中級レベルであろう大半の日本人高校生・大学生が目標とするにはあまりに高すぎるレベルであるが、TOEFL エッセイ程度であれば彼らが執筆できないレベルではない。

(4) 今後

本研究企画課題の締めくくりとして、模範英語小論文と日本の高校生・大学生が執筆するエッセイ (入手済み) を詳細に比較したいと考えている。しかし、一部の学生に同意書を配布しなかったため、成果発表が遅れている。後追いではあるが、現在エッセイを本研究に使用させてもらう許可を得る手続きをとっているところである。

近年中に The Nikkei Weekly 社説、朝日英字新聞社説、TOEFL Essays と、高校生・大学生が執筆した英文を、質的・量的に比較し、本稿に記載した以外の学術的知見を導出していく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者および連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

(1)

Fumihiko Ito (単著)

Sentence Fragment Categories and Their Frequency of Occurrence in Japanese ESL Writing

2015 年

Southern Conference on Linguistics

Vol. 39. No. 2 pp. 51-68 査読有

[米国]

(2)

Fumihiko Ito, Hikaru Misumi (共著)

The Distinctive Use of Coordinating and Subordinating Conjunctions in Japanese EFL Academic Compositions.

2017 年第 35 号

群馬高専レビュー

(3)

Fumihiko Ito (単著)

An Investigation of Factors Influencing the Quality of Japanese University ESL Writing: The Relationships between L1 and L2 Writing Skills, and between L2 Reading and Writing Skills

2015 年

The 4th Hong Kong International Conference on Education, Psychology, and Society (Proceedings 全 8 ページ、学会参加者に USB メモリーで配布)

(4)

伊藤文彦・三隅光 (共著)

The Nikkei Weekly 社説記事の計量調査 ライティング力の向上を視野に入れた研究
全国高等専門学校英語教育学会研究論集
第 37 号

pp.41-50 査読有

〔学会発表〕(計 4 件)

(1)

伊藤文彦

日本人英語学習者の等位接続詞の使い方

2014 年

日本英語表現学会

第 43 回研究大会

(2)

Fumihiko Ito

The Two Relationships between L1 Writing and L2 Writing Skills, and between L2 Reading and L2 Writing Skills of Japanese ESL University Students

2004

The European Conference on Language Learning (ECLL)

(3)

Fumihiko Ito

An Investigation of Factors Influencing the Quality of Japanese University ESL Writing: The Relationships between L1 and L2 Writing Skills, and between L2 Reading and Writing Skills

2015 年

The 4th Hong Kong International Conference on Education, Psychology, and Society

(4)

伊藤文彦

The Nikkei Weekly Editorials の計量調査

2017 年

全国高等専門学校英語教育学会第 41 回研究大会

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 文彦 (ITO FUMIHIKO)

群馬工業高等専門学校一般教科人文准教授

研究者番号: 50413745